



2017年11月に新築した第二牧場。手前が搾乳牛舎、奥が育成・乾乳牛舎。第一牧場では和牛素牛生産を手がける(写真提供=みやぎの酪農農業協同組合)



きれいな水・最適な飼料で もう一口を

酪農の知識ゼロからのスタートを余儀なくされた(株)エムエスファームの佐藤工季さんは、これまでにさまざまな苦難にぶつかってきた。試行錯誤のなかで“きちんと喰い込ませることの大事さ”を知り、それを常に心がけ日々の乳牛管理に励む。



開口部を多くし、空気の流れを意識した牛舎に。熱がこもらないように天井を高くし、空気がよどまないよう考慮して設計した。ファンは全頭に当たるよう20台を設置

宮城県 白石市

(株)エムエスファーム 佐藤 工季さん



佐藤工季さん(左)と全酪連・仙台支所の佐藤晃一さん

喰い込ませることの大事さを痛感

「エサが喰えないと、乳量の減少はもちろん、疾病や分娩事故など、すべて悪いことにつながる——このことは身をもって痛感している」と、佐藤工季さん(38歳)は過去の経験を語り始めた。

工季さんが酪農を始めたのは22歳のとき。当時は亡き父・正志さんが乳牛管理の全般を担い、工季さんはそれを手伝っていた。10年ほど前に突然正志さんが身体を壊し、仕事ができない状態に。突如、工季さんに経営主のバトンが渡ったのだ。「自分が経営主になった年は“分娩すればダメになる”の繰り返しだった

概要

- 経産牛60頭（うち搾乳牛52頭）、未経産牛20頭
- 牛舎／搾乳施設
繋ぎ牛舎／パイプライン
- 自給飼料：15ha（ライ麦、オーチャード・チモシーの混播）
- 昨年度年間出荷乳量：547t
- 乳検成績：M1万1365kg、F3.83%、P3.34%、SNF8.93%
- 従事者：本人、妻・かほりさん、従業員2人

た。当時、25頭ほどの搾乳牛のうち10頭以上を分娩事故で亡くしてしまった」と顔をしかめる。この苦い経験から工季さんの挽回が始まった。

分娩後、乳牛を死なせないためには何をすべきか——工季さんは、専門書を読んだり周りの関係者に聞くなかで、“乾乳期に喰い込んでいる牛は病気が少ない”という情報を耳にした。“乾乳牛は搾れないし利益にならないから良いものを喰わせても無駄”という考えを一変し、“いかに乾乳期に喰い込ませるか”に焦点を当て、手当たり次第いろいろな方法を試してきた。その結果、「どんなに良いサプリメントを与えても、きちんと喰い込めていないと何の意味もない。逆に、きちんと喰い込めてさえいれば、分娩後の立ち上がりも順調で、その後の疾病もない」と、エサを喰い込ませる大事さに

気がついたと語る。なお、経産牛の更新は、毎年1割程度と低く、長命連産を実践している。

きれいな水をいつでも飲めるように

もう一口食べてもらうためにしていることは？との問いに、「きれいな水を飲ませること」と即答する工季さん。かほりさんと従業員の方が、3日に1回は歯ブラシ、タワシ、スポンジを使って、すべてのウォーターカップを掃除する。ウォーターカップに飼料が沈んでいないか、水垢が付いていないかなどを隈なくチェック。「牛にとって水は一番のエサ。粗飼料にする濃厚飼料にしる、水がなければ喰い込めない」と、牛にきれいな水を飲ませるためには努力を惜しまない。水は加圧給水ポンプで送っているため常に一定の水圧を保ち、配管も太めのものを使用している。工季さんは、「牛はきれい好き。汚い場所にはいたくないし、汚い水も飲みたくない」と話す。

それぞれの時期に合った飼料を

エムエスファームでは粗飼料の品質に対してもこだわりを持つ。「自給粗飼料は、可能な限り適期刈りを。刈り取った粗飼料はその都度分析してもらい、その結



「牛を見ていると、“水を飲みながら”という行動が多いと感じる」と工季さん。ウォーターカップは常にきれいに保つよう心がける



加圧給水ポンプで常に一定の水圧を保つ





“もう一口”のために、乾乳牛に関しては密飼いしないよう気を配る。収容頭数は1区画2頭まで。なるべくゆったりさせることで喰い負けを防ぐ。また乾乳期の飼料は粗飼料の喰い込みに合わせ、移行期配合飼料を給与調整している



ルポ
2



取材時は8月初旬の暑い時期。「この時期の喰いの低下をいかに最小限にするかが努力のしどころ。きれいな水を常に飲める、またファンによって風が牛に当たる環境作りに徹している」と工季さんは話す

果に合った飼料設計を組んでもらう」とのこと。分析結果を見て、搾乳牛、乾乳牛、育成牛、どの時期の牛に最適かを、きちんと吟味し給与する。「地域柄、飼養頭数に対して草地面積が少なく堆肥過多になってしまうため、できる粗飼料は窒素やカリウムが高くなる。エムエスファームでは、それらを抑える専用の肥料を使用するなど、土壌の段階からの気遣いがうかがえる」と、飼料設計を担当する全酪連・仙台支所の佐藤晃一さんは話す。

足りないぶんは輸入乾草を使用。輸入乾草も成分を見てどの牛に合うかを考えて与える。「自給飼料であろうが購入飼料であろうが、牛がきちんと喰い込めるエサかどうかのポイント。嗜好性が良



乾草は湿気が外から入ってこないよう、海上コンテナで密閉保存。使うぶんだけ取り出しカビさせないように徹底。ロールサイレージは道路を挟んだ空き地で保管



朝晩の搾乳後、朝牛舎に入ったとき、夜自宅に戻る前……常にエサが食べられるように、従事者全員エサ寄せは“気がついたら行なう”を徹底している

佐藤工季さんに質問

Q 今後やってみたいこと、目標は？

少ないとはいえ、分娩事故がないわけではないので、年間分娩事故数ゼロを目指したいです。無駄な事故で牛をダメにしてしまうことはなくしたいです。そのためには日々の徹底した管理、それこそ“いかに喰い込ませられるか”に尽きますね。



く喰い込みが良い飼料であれば、多少コストがかかっても最終的には元が取れる」と、工季さんは飼料へのこだわりを話してくれた。

“牛をきれいに”を第一に

搾乳牛は、アルファルファ、スーダン、ライ麦、乾燥デントコーン、ビートパルプ、ビール粕、添加剤入りの配合飼料を混合、加水し水分調整を行なったTMRを給与する。TMR調製は1日1回、夜の搾乳前に1日分与える。「夏場に1日2回給与していた頃、早朝の一番涼しくて牛が食べる時間帯にはエサがなくなっていた。夜に1日分与えたほうが、朝方涼しいうちに食べてくれる」と、給与方法の変更で“もう一口”

を実現した。

最後に、「牛をきれいに」——これを常に念頭に置いている」と工季さんは語る。「酪農を始めた頃、“牛が汚い酪農家で成績が良いところはない”と言われ、それから除糞を頻繁にするなど、なるべく牛を汚さないよう徹底した」と話す。実際、“牛をきれいに”を心がけてから乳量が上がリ成績が良くなった。「水や牛体の清潔さ、居心地の良さは、成績を左右するエサの喰い込みに大いに関係する」と、長年の変わらぬ心がけも語ってくれた。

牛床は少し広めにし、牛が斜めに寝ないようにサイドパーティションを設置。また牛の移動時に急旋回させないよう、中央通路を広く設計した。これも無駄な事故を減らすため

